人妻OLるり子と
中出し会議中
【ノベル版】
ルンルン

人妻 OL るり子と
中出し会議中

著者：ルンルン

会社近くの駐車場に車を停め、エンジンを切る。
沈黙が降りた車内で、るり子はそっと深呼吸をしてから、ゆっくりと外へ歩を進めた。
「……ふぅ」
車から降り立つ際、乱れた白いブラウスと、膝上の紺色スカートを慌てて整える。
るり子は精液の跡の残るスカートのプリーツを撫でつけていた。
その裾から伸びる引き締まった腿のラインは、運転席から見つめるたくみの視線を逃れられない。
彼女のわずかな仕草の一つ一つが、たくみの目を惹きつけた。
「……大丈夫、るり子？」
たくみが心配そうに声をかけると、るり子は振り返り、控えめに微笑んだ。
その頬はまだほんのりと赤みを帯びている。
「うん……大丈夫。でも、まだ、ちょっと……」
言葉を濁しながら、自分の下腹部をそっと押さえる仕草をした。
昨夜からの激しい熱い余韻が、パンティ越しにもまだ彼女の体に残っていた。
特に秘められた奥のぬめりを、るり子は無言で意識していた。
その微かな仕草と、潤んだ瞳が、たくみの欲望を再び刺激する。

「……朝から、緊張するね」
隣を歩くるり子の、小さな吐息がたくみの耳に届いた。
その声には、出勤前の張り詰めた空気と、まだ体に残る官能の余韻が混ざり合っている。
たくみの胸の奥には、昨夜から今朝にかけての甘い記憶がじわりと蘇っていた。
そして再び下腹部が、じんわりと熱を帯びていくのを感じた。
たくみは、無意識に彼女の肩にそっと手を添えた。
薄いブラウス越しに伝わるるり子の肌の温もりに、触れただけで心臓が早鐘のように打つのを感じる。
「大丈夫だ」

そう囁きながらも、たくみの視線は、まだ少し乱れたるり子の髪や、色っぽい鎖骨へと吸い寄せられていた。

会社のエレベーターに乗り込むと、朝の混雑で体が密着する。

背中や腕が触れ合うたびに肌の熱が直接伝わり、るり子の体も自然とたくみの側へと寄せられた。

かすかに香る彼女のシャンプーの匂いと、まだ汗の混じった甘い匂いが、たくみの理性を揺さぶる。

そして、膨らむ胸の先が薄いブラウスの布越しに、たくみの腕に触れる感覚……。

その柔らかな刺激に、たくみの下腹部はさらに硬さを増し、抑えきれない欲望が蠢き始めた。

るり子もまた、その熱を感じ取ったのか、小さく息を呑み、わずかに身を震わせるのが分かった。

エレベーターの混雑と、肌が触れ合う近距離で、るり子は腹部に硬く突き立つたくみの勃起を感じ取った。

「……また……」

小さく、しかしはっきりと呟かれたその言葉は、悲鳴にも、あるいは誘いにも聞こえた。

るり子は咄嗟に唇を噛みしめ、みるみるうちに頬を赤く染める。

羞恥と、そして抗いがたい欲望が混ざり合い、彼女の体は自然に、そして勝手に反応し始めていた。

下腹部がじわりと熱を帯び、内側から疼くような感覚が広がる。

「あっ……」

無意識のうちに、るり子の体がわずかにたくみの方へと擦り寄る。

心の奥で、「セックスしたい」という衝動が、抑えきれないほどにじわじわと膨らんでいくのを感じた。

たくみもまた、るり子の体の変化と、彼女から発せられる熱を感じ取っていた。

エレベーターの中という状況が、二人の背徳感をさらに煽り、この上ない興奮をもたらしていた。

るり子の手がそっとたくみの股間を握りしめる。

「……我慢しろよ……」

たくみが、るり子の耳元に唇を寄せ、誰にも聞こえない声で囁く。

その声が、るり子の全身に震えを走らせた。

エレベーターが目的のオフィスフロアに到着し、ドアが開く。

一歩外に出ると、ざわめく人々の雑踏の中に放り出された。

しかし、その喧騒がかえって、互いの秘めた欲情をさらに高めるフィルターとなる。

二人の肩が、背中が、まるで偶然であるかのように軽く触れた。

その肌から直接伝わる熱と、体の中でくすぶる想いが交錯した。

オフィスという公の場で、これほどまでに官能的な繋がりを感じていることに、二人だけの背徳感が募る。

「……あんっ」

るり子は、誰にも気づかれないように、小さく息を整えた。

そして、人波を縫うように歩きながら、ちらりとたくみの視線を確認する。

彼の瞳の奥には、昨夜の甘美な記憶と、今朝の抑えきれない昂ぶりが混ざり合っていた。

その熱っぽい視線だけで、二人は言葉を交わさずとも、互いの心と体の全てを理解し合っていた。

（今夜は、どうしよう……）

るり子の胸の内には、そんな期待と、わずかな焦燥が渦巻いていた。

「るり子先輩、会議室に行こう」

そう言って、たくみは自身のデスクからスッと立ち上がった。

その声は、業務連絡を装いながらも、どこか期待に満ちた響きを含んでいる。

――――――――――――――――――――――――
人妻 OL るり子と中出し会議中

著者・制作：ルンルン

発行：2026 年 4 月

――――――――――――――――――――――――